猫蓑通信

第81号
平成22年
（2010年）
10月15日発行
（年4回発行）

恋句のこと

青木秀樹

万葉集、勅撰和歌集をはじめ、古来日本の歌人は恋歌が巧みであった。現代人に最もなじみのある「小倉百人一首」のおよそ三分の一は恋歌が占めている。

その撰をした藤原定家は

来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに
焼くや藻塩の身もこがれつつ

を自選している。後の歌合せの模範となった村上天皇の天徳内裏歌合せ（九六〇年）での好勝負

左　壬生忠見
恋すてふわが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひそめしか

右　平　兼盛
忍ぶれど色に出にけりわが恋は
ものや思ふと人の問ふまで

はともに小倉百人一首にとられている。上流階級の恋愛や家族形態がいまとは異なるとは言え、男性から女性への告白の歌、女性からの断りの歌、つれなくなった男への恨み節など相聞歌が多い。

時代が下って、松永貞徳門下の異端者であった松江重頼が著した『毛吹草』は貞門俳諧の方式の書で、当時大いに利用されたものであった。その巻第一で俳諧と連歌の句体の違い、巻第二で俳諧四季之詞、連歌四季之詞、俳諧恋之詞、連歌恋之詞が記されている。連歌の伝統を引き継ぎ、物付（詞付）を主体とした貞門の俳諧らしい手引書である。今では判らない言葉も多く含まれるが、現代人からみればいずれも古臭い感じがする。連歌師でありかつ俳諧師であった貞徳がはじめて俳諧の会をひらいたのが寛永六年（一六二九）であったことから考えると、連歌を正式の文芸とし、読み捨ての余興であった俳諧がひとつの文芸としての地位を得た頃の手引書としてみればもっとものことだと思われる。

次が俳諧（連句）を文芸として完成させた芭蕉の恋句である。東明雅先生の『芭蕉の恋句』（岩波新書）は何度読み返しても名著である。貞享年間、元禄元～二年、元禄三年、元禄四～七年と分けて、芭蕉の恋句の変遷が解説されており、いかに芭蕉が恋句の達人であったかが分かる。

足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬ〴〵のあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
風ひきたまふこゑのうつくし　越人
（「雁がねも」の巻）

ほそき筋より恋つのりつゝ　曲水
物おもふ身にもの喰へとせつかれて　芭蕉
月見る顔の袖おもき露　珍碩
（「木のもとに」の巻）

貞門俳諧から心付（句意付）の談林俳諧を経て、芭蕉の余情付が恋句の世界をいかに豊かにしたかを鑑賞できるのがこの書の特徴である。連句の付所・付味の手法を学ぶのにも芭蕉の恋の句はわかりやすいサンプルになると思われる。

百人一首の恋の歌でも、芭蕉の恋句でも形は人情自であっても、決して自分の体験を詠んでいるわけではない。蕉風の俳諧は前句の場面・人物・恋の情を見極めて、付所を探り創造的に付句を詠んでいるのである。現代の連句の恋句はあまりにも貧弱である。「手を握る」、「抱き合い」など安直な恋句が氾濫している。『猫蓑作品集』にはそのレベルの恋句は見かけないが、それでも平凡な恋句がまだまだ多い。複雑で多様な現代人の恋をどう捉えるか、明雅先生が常々「恋句は情を詠むものだ」と言われていたことを念頭に置いて、現代ならではのすばらしい恋句を生み出したいものだ。

●目次●

発句の挨拶　東明雅　2
発句と挨拶　東明雅　3
第二十回　猫蓑同人会作品・歌仙八巻　4
第百十四回　猫蓑例会作品・歌仙十巻　8
温故知新　3：発句悪（わろ）ければ一座みなけがる　13
美奈ちゃんのお父さんとK先生（下）　小野フェラー雅美　14
羅浮亭正江宗匠追善脇起二十韻　倉本路子　捌　15
羅浮亭正江宗匠七回忌　橘　文子　15
事務局だより　16

発句の挨拶

東　明雅

平成十一年一月十五日刊『猫蓑通信』第三十四号より転載

なに波津にあし火焼家はすすけたれど
炭賣のおのがつまこそ黒からめ　　重五

これは「冬の日」五歌仙の一つ、第四番目の「炭賣」の巻の発句である。前書は「万葉集」（巻十一）作者不明の歌「難波人葦火焼く屋の煤してあれど己が妻こそ常めずらしき」によっている。それを含めて一句を解釈してみると、「難波の浦で葦火を焚いて暮らす貧家の女は、煤けて色が黒いけれども、自分の妻と思えば、常に新鮮で愛すべき女性であるという古歌があるが、炭賣のお前の妻も嘸かし真っ黒だろう。しかしそれでもそなたの為には最愛のよい女房に違いない」という事になろう。

この発句の解には異説もあるようだけれども、私が問題にするのは、この句の意味、あるいは表現でなく、挨拶の問題である。

「冬の日」の第一巻、「狂句こがらし」の巻の発句は有名な芭蕉の「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」で、初めて参会した名古屋の一座、ことにおそらく亭主であった野水に対して、自己紹介をかねた挨拶が十分すぎるほど完璧になされており、野水も亭主としてはっきり「たそやとばしるかさの山茶花」と挨拶を返している。

第二巻の「はつ雪」の巻において、野水が発句「はつ雪のことしも袴きてかへる」と詠んでいるのは、「世を遁れたいと思うけれども、まだそれも叶わず、折角、初雪が降ってもゆっくり雪見のいとまもないまま、今年も窮屈な袴をはいて外出先から帰って来ることだ」という意味であり、第一巻の風狂に徹した芭蕉の挨拶に対して、「私はまだ到底そこまでは到る事が出来ません、お恥ずかしいことです」と、芭蕉に対しての挨拶である。脇の杜国も「霜にまだ見る蕣（あさがほ）の食（めし）」と付けて、「いや、私もご同様、霜のころまで咲残った朝顔を眺めながら、朝食をかきこむ侘しい身の上です」と、野水と同じような俗務の忙しい身を歎いて挨拶を返している。

次に第三巻、「三冊子」によれば、「雪月花の事のみ云たる句にても、挨拶の心なりとの教也」とある。折からの変りやすい空模様を擬人的に表現した杜国の発句「つゝみかねて月とり落す霽（しぐれ）かな」は、このような天気の候よくお集り下さいました」の意もあるであろう。そして、これを受けた重五の脇「こほりふみ行水のいなづま」は、陰晴定めない時雨に対して、瞬時に変化する稲妻を照応させ、一応の挨拶としている。

次に、順序を飛ばして、第五番目の「霜月の巻」から見ることにしよう。「霜月や鶴（こふ）の彳々（つくづく）ならびゐて　荷兮」は、前書に「田家眺望」とある通り、眼前嘱目の句である。鶴の並んでいるのを暗に一座の連衆が並んでいるのに比喩したという註などもあるが、それは考え過ぎであろう。田家の眺望をそのまま挨拶としたものであり、これに付けた芭蕉の脇「冬の朝日のあはれなりけり」も、発句とつないで一首の和歌のように仕立てた所に挨拶があろう。

ところで、問題の四番目に出てくる炭賣とは何者であろうか。もちろん当日、重五が町でふと嘱目した可能性も全くないわけではないが、それでは挨拶はどこにあるというのであろう。私はこの炭賣は白楽天の新楽府の一首「賣炭翁」をモデルとして作り上げた重五の戯画像であると思う。芭蕉がこの第一巻で、自らを藪医師竹斎にたとえ、木枯にふかれ吟遊する身を戯画化して一同に挨拶したのに習い、富裕な木材商の身を、「薪を伐り炭を焼く南山の中、満面の塵灰煙火の色」と貧に苦しむ「賣炭翁」に擬して、芭蕉に自己紹介の挨拶を返したものであると思う。色の黒い妻を出したのは俳諧のたわむれである。

発句と挨拶

東 明雅

平成十一年十月十五日刊『猫蓑通信』第三十七号より転載

発句には挨拶が必要であるが、その挨拶は相手・時・場所次第によって変化し、毎回固定したものではない。たとえば挨拶によく似た辞儀にも五体倒地の礼拝から、平身低頭の三拝九拝、最敬礼、一礼・黙礼・会釈などさまざまの種類があって、それぞれ適当な時に適当な方法で感謝の意を示し、尊敬の意をあらわしているのである。小笠原の礼法では真の礼・行の礼・草の礼と区別しているようであるが、発句の挨拶もせめてこの位は分別して作らないと、効果を上げられないのではなかろうか。今、真・行・草の挨拶の例を芭蕉の作品から取り上げ説明してみよう。

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉

貞享元年、名古屋の野水邸で、全く初対面の連衆と一座した芭蕉は、自己紹介をかねて、自分を名古屋馴染の藪医師竹斎に比すことによって、一座の者に挨拶している。それ故、亭主の野水や連衆の重五までが、芭蕉にならって自己紹介をかねた発句を作って挨拶し、かくて「冬の日」五歌仙は出来上がったのである。これはまさに真の挨拶の発句であろう。

しかし、このように堅くるしい挨拶の発句は、芭蕉一代の中でもこの時限りのようで、

旅人と我名呼ばれん初しぐれ

たとえば貞享四年の由之亭における「笈の小文」の旅送別会の発句では、一座が愛弟子ばかりだっただけに、自己紹介というよりは、自分の好きな旅と初時雨を讃える挨拶の句となっている。これは行の挨拶の発句であろう。

そもそも、発句の挨拶は普通、客が主に対し、またその時・その場に対する挨拶を含んでいるのがよいとされるが、たとえば月毎の例会で、メンバーも場所も変りばえしない時は挨拶するものに窮する場合もあろう。そのような時は、当季を詠みこむだけで挨拶になるとも言われる。たとえば元禄七年、大坂の其柳亭で、支考・洒堂・惟然などと巻いた一巻の発句は「昨日からちよつ〳〵と秋も時雨かな」であったが、後に改めて「秋もはやばらつく雨に月の形（なり）」とした。これはいわば草の挨拶の発句であろう。

原句はいかにもお粗末であったが、改案の句になると、俗語を使った軽みは同じであるが、晩秋のものさびた季節感を出し、これなら挨拶としても十分であろう。

要するに、俳諧の席で客が主人に挨拶し、また主人が客に挨拶を返すのは、会の始まる前に主客お互い、また一座の気分を和ませ、互いに志の通い合う仲間同志である事を確認する為である。それさえ出来るならば、あるいは出来ているならば、挨拶は簡単の方がよいだろうし、あるいは挨拶など無くてもよいのである。

例の「五月雨を集めて早し最上川」の一字を換えて、「五月雨を集めて涼し最上川」としただけで、元禄二年五月、大石田における歌仙は、発句に挨拶をもつ事になった。これは、客である芭蕉が、亭主である高野一栄に対する挨拶であるが、この時芭蕉は亭主一栄の外に、彼が旅中、数句を送って馴れ親しんだ出羽の国に対して、最上川を出す事によって挨拶をしている事を忘れてはならない。

「三冊子」（赤）に、

早稲の香や分け入る右は有磯海
一尾根はしぐるる雲か雪の不二

の二句を掲げ、大国に句を作る場合は、その大国にふさわしい品格のある山川名所を詠めと教えている。加賀の国なら有磯海というような名所、富士ならば名山にふさわしい大景を詠んでこそ挨拶ともなるであろうと言っているのを思い出して欲しいところである。

第二十回　猫蓑同人会作品　1～4

1・初蛍の座

歌仙「初蛍」　坂本孝子　捌

わが庵は水の名所よ初蛍　孝子
　田植のあとで分けるおにぎり　恭子
幼児は回転椅子を高めぬて　政志
　何のネヂやらテーブルの下　有子
一条の月差してをり籠の猫　恭
　衝動買ひを誘ふうそ寒　孝
ウ　新しき黄落踏めば人恋し　有
　少し静かに飲めといふママ　志
いろ事は心遣ひを手始めに　孝
　西南西が吉とでる籤　恭
杭州のあたりあちこちぶらり旅　志
　このソケットは盗聴器かも　有
小晦日荒げて見せる借用書　恭
　某部屋に凍つる月影　孝
生涯に一度の栄誉噛み締めて　有
　やり手の友も懐かしき今　志
舞扇花を掬へば網となり　孝
　小鳥は卵抱いて眠れる　恭
ナオ　いとけなき沙門の木魚うららかに　志
　礼から学ぶ社員研修　有
党首なり前後を歩く警護団　恭
　シャネルの匂ふ空港の風　孝
くちなはを豊かな胸にくねらせて　有
　夜明けの鴉死ねと嘯く　志
遠くより文明開化の太鼓来る　孝
　織物工場湖の傍　恭
規則とはハラスメントの裏側で　志
　ひとりで食べる小さき寄せ鍋　恭
留学の異国の月はなぜ赤い　有
　エルミタージュに深みゆく秋　孝
ナウ　歯科医院待合室を覗く鹿　有
　やあと招けば人違ひなり　志
古きよき喜劇映画に雨が降る　孝
　デジタルテレビやっと取り付け　恭
ゴンドラのゆらりと越ゆる花の谷　志
　歌のとぎれぬ遠足の子等　有

連衆　式田恭子　峯田政志　佐々木有子

2・初蜩の座

歌仙「八咫烏」　本屋　良子　捌

八咫烏祀る社や青嵐　良子
　ワールドカップ汗の応援　志世子
初浴衣幾何紋様を着こなして　央子
　総領息子ちょきばかり出す　一枝
月光げに友の輪唱ハーモニー　世
　古き都の薨爽やか　良
ウ　喉ごしの良き新蕎麦に舌鼓　枝
　言葉にならず吃る告白　央
甘えさせくれる姉さん女房で　良
　口蹄疫に気も漫ろなる　世
いつまでも貧乏神に取りつかれ　良
　村長も出る跡目争ひ　枝
雪上車轍ふたすぢ月の下　央
　北極点に虎落笛聞く　良
幸ひを求めさ迷ふ山の奥　世
　粛々と言ひ何もせぬ人　央
花の宴王道ゆくや三代目　枝
　姫蜂なれど凛と飛びたつ　世
ナオ　雛流し鬼界ヶ島に着けよかし　央
　やっと回収探査衛星　枝
無農薬野菜育てるプランター　世
　複眼で見る今の濁世を　良
しやうもない恋の噂の週刊誌　枝
　冗談からも共白髪まで　央
表札に寓の字のある谷戸住ひ　良
　ぬる燗ゆくり昼餉楽しむ　枝
五十ページづつ読む源氏物語　央
　唐茱萸ともに摘みし少年　世
感化院教官とゐる月の窓　枝
　防災の日のサイレンが鳴り　良
ナウ　庭のものあれこれ束ね盆棚に　世
　ぢいぢの膝にそっくりの孫　央
実験着博士の夢は不老不死　良
　マイレージ溜め宇宙旅行へ　世
舞の手の扇に受ける花の滝　央
　堰遡上する若鮎の群　枝

連衆　秋山志世子　遠藤央子　西田一枝

3・夏蚕の座

歌仙「開き癖」

橘 文子　捌

青梅や師の書につきし開き癖　文子
　佳き声習ふ付子鶯　啓子
ガラス窓馴れぬパソコン立ち上げて　郁子
　注文すればすぐ届くピザ　碧
お隣の笑まひ親しげ月今宵　常義
　切符頂き美術展観る　義
ウ 遠くにはべったら市の賑はひも　郁
　拭き掃除する妻の鼻唄　啓
あの恋の傷はいまだに痂に　碧
　猫の名前の曰く因縁　啓
大寺の鐘厳かに響き来て　郁
　ポンペイの旅冬浅き頃　同
銀細工職人仰ぐ寒の月　啓
　紙飛行機はゆるく旋回　義
珈琲とクッキー憩のひと刻に　郁
　雀斑の子も玉を蹴り上げ　碧
原っぱの消えた町々花吹雪　同
　ごろり寝転ぶ炉塞ぎの後　義
ナオ やどかりをずっと育ててゐる少年　碧
　J・POPには一寸うるさい　郁
ポケットの穴を気にしてバスの中　義
　探査機はやぶさ玉手箱持ち　啓
向日葵の空に国境線の無く　碧
ビキニの胸はツンと尖りて　義
もっこすと肥後の地酒に酔ひ潰れ　郁
　おもかげ慕ふ苧環の舞　義
週末は泣ける映画を観にゆかむ　啓
　老境豊かB面もあり　碧
誘はれて八幡宮の月を賞で　郁
　山の湛へる鈍色の霧　啓
ナウ 茸取り穴場のことは口つぐみ　義
　FXはタイミングです　同
パワースポット我も我もと夢をみる　啓
　釣果自慢の魚拓三昧　郁
百間の濠に枝垂るる城の花　文
　平和の郷へ降りる佐保姫　碧

連衆　小池啓子　東 郁子　松本 碧
　生田目常義

4・花潜の座

歌仙「晴れてまた」

青木秀樹　捌

晴れてまた雨となりけり七変化　秀樹
　蟷螂の子の掴む葉の裏　美奈子
窯出せば手捻りの壺なかなかに　和代
　パイプの烟ほっと吹き上げ　士郎
鍵盤に月の光を遊ばせて　奈
　主待つ卓旬の栗飯　樹
ウ 商談の成りて北京の街さやか　士
　魚市場には外つ国の人　代
婚活は女性ばかりが元気よく　樹
草食むをのこ拉致しちやはうか　奈
「はやぶさ君」小惑星の砂抱きて　代
　冬月揺らすブブゼラの音　士
凍虻が後戻りする鼻の先　奈
　目赤不動にふいの参詣　樹
快気して大樽囲み酌み交す　士
　昭和生れの天下泰平　樹
満つる花吟遊詩人の原風景　代
　春の五彩のショール靡かせ　奈
ナオ どんたくの稚児行列のすまし顔　代
　ねずみ男もついて歩いて　士
消費税みんなで上げれば恐くない　奈
　珈琲紅茶お気に召すまま　樹
虹の橋渡る夢みて特訓を　士
　無精髭から滲みだす汗　代
思ふこと言へずに更ける忍び逢ひ　樹
　開かずの間にはｎｏｎの切なく　奈
許されよ胸内に鳴るグレゴリオ　代
　水面の泡の消ゆる清流　士
天馬には玉兎がそっと座りをり　奈
　秋の名残に香を薫きしめ　樹
ナウ わが山で籠いっぱいの茸狩　士
　老年の旅北を目指せる　代
輝きはセピア色なりルイ・ジューベ　奈
　縄文土偶寒明けの棚　代
母校にて初花に会ふ同期会　樹
　時計のねぢをのどらかに巻く　士

連衆　鈴木美奈子　長崎和代　横井士郎

第二十回　猫蓑同人会作品　5～8

5・夏茜の座

歌仙「最上階より」　鈴木千惠子　捌

新都心最上階より梅雨に入る　千惠子
大きく揺れるあぢさゐの毬　淳子
ハミングで足踏みミシン弾むらん　冬乃
また教へてとせがむ知恵の輪　鐵男
月の舟ゆったり越える山の辺を　遊民
木馬（きんま）の路に邯鄲を聞く　乃
ウ スカーフの巻き方に凝るそぞろ寒　淳
ドモンジョ・ドヌーブ好みそれぞれ　民
告白し振られ懲りずに次探す　淳
忍の一字で射とめたる妻　乃
古雑誌古紙袋やたら溜め　男
備前火襷さっと掛かりて　淳
狂四郎剣に冬の月の差し　男
風呂吹き大根柚子味噌が好き　民
廃線を訪ねるツアーまじる婆　乃
高い教養低い年金　男
花咲けば葷酒山門許されて　乃
結界の縄蝶のひらひら　淳
ナオ 春愁ふインクの壺の小宇宙　男
持って帰ったイトカワの砂　淳
故郷への電話で告げぬ暮しぶり　乃
政治献金ありやなしやと　民
鯉幟クレームつく程大型で　乃
冷素麺を流す竹樋　男
飼犬の絡まる綱が馴初に　乃
バツイチ同士恋のリメイク　民
割れた鉢アロンアルファの出番です　男
秘密基地にはお菓子いっぱい　淳
職人の仕事帰りを照らす月　同
べったら市の土産ぶら下げ　民
ナウ 白秋忌ひとりの旅は海沿ひに　乃
呼べば応へて通学の子等　淳
ｉＰａｄ予約の列の長々と　民
退職日程やっと固まる　男
夢枕神告げ給ふ花万朶　千
途切れてはまた続く囀　乃

連衆　上月淳子　百武冬乃　林　鐵男
内田遊民

6・天牛の座

歌仙「業平忌」　武井雅子　捌

業平忌八つ橋かかる片ほとり　雅子
黄の鮮やかに浮かぶ河骨　千町
威勢よく童謡歌ふ幼なにて　實
室内犬の足にまつはる　吉文
野葡萄でジャム作りゐる窓に月　未悠
テレビニュースにお相撲のこと　町
ウ 芸術祭漫才名人座をわかし　吉
あの笑ひ顔たまらなく好き　實
イ・ビョンホン夢の中まで現れて　悠
七つの罪もちょっとなら乙　町
目くじらを立てる世間は住みづらい　實
雪のババリア馬馳せる王　町
冴ゆる月尖塔の鐘響きける　吉
羊羹分けて親子なごやか　實
意を決し自転車通勤メタボ策　悠
少しきつめで穴のジーパン　町
北国はただ一息に花となる　同
蜂の巣箱の並ぶ草原　吉
ナオ 春霞ふはり操るグライダー　實
水煙草吸ふ城郭の街　悠
道化師のとんぼを切れば掏摸が掏り　町
３Ｄ映画メガネ貸し出す　吉
登山靴剱岳に立てる三角点　悠
お互ひ様に蓼を喰ふ虫　町
首ったけこれがいつまで続くやら　實
千姫の胸若衆の腕　町
しゅんしゅんと鉄釜の湯の煮えたぎる　吉
偽造の旅券ポケットの中　町
新調の背広くっきり月の影　實
今年酒酌む同窓の友　悠
ナウ 露ほどの反古の余白の命なり　町
回覧板はすぐに隣へ　吉
勧請の依頼丁重檀那寺　實
からくり時計奏で続ける　悠
降りたちし芝居小屋跡花万朶　雅
絵凧字凧を揚げる村人　悠

連衆　原田千町　梅田　實　永田吉文
棚町未悠

7・山繭の座

歌仙「雨楽し」　中林あや　捌

雨楽し無限の紫陽花明りかな　あや
ゆっくり伸びるまひまひの角　暁巳
食材の吟味はシェフの役ならん　英子
上着も靴も軽いのが好き　わこ
月代に山襞泛ぶ幾重にも　久美子
ウ　噂話か秋の出替　わ
西鶴忌賽銭数へるアルバイト　巳
掃除洗濯真面目人生　英
夢の中崇られたいと身をよぢり　わ
キッスマークが胸の谷間に　久
ミュージカルドレミファソラシドさっきから　わ
寒風抜ける教会の鐘　巳
毛糸編む民族衣装の婆に月　英
手押し車は電動がよし　わ
ぎゅう詰めのエレベーターへやっと乗り　や
スポーツセンターいつも籤引き　わ
祝樽割れば喝采花の幕　巳
土産ものなら木の芽漬など　久
ナオ　豆満江小綬鶏歩む向かう岸　同
昭和も遠く平成の今　わ
取りました育児休暇はたっぷりめ　や
蛇口きっちり締めぬ尻抜け　巳
ペルシャ猫置物のごと棚の上　久
玻璃の簾をせめて動かし　同
西日の矢刺さり瞳もうるむ恋　わ
ふたりで落ちたちゃうどよい穴　や
幹事長総理促し退任す　久
円周率は昔通りに　巳
さはやかな旅の途中の道の駅　わ
こはだ旨しと月も昇りて　同
ナウ　CDの浪曲を聴く文化の日　巳
当てが外れた遺産相続　英
パスワードまめに換へるといふけれど　久
ぐるりと巡るコミュニティバス　同
花吹雪途切れしづかな袋町　や
まぼろしを見るかぎろひのなか　わ

連衆　島村暁巳　佐古英子　横山わこ
副島久美子

8・斑猫の座

歌仙「新しき風」　鈴木了斎　捌

新同人の加入を祝して

新しき風の棲みつく青葉かな　了斎
蝉生まれ継ぐ築山の穴　美恵
立つしやがむ園児は高く声挙げて　敬子
長き鎖をお散歩に曳き　路子
いつまでも開かぬ踏切月昇る　路
簾外せば窓の広々　斎
ウ　はららごの紅うつしゆく箸先に　恵
昨日半玉けふは一本　斎
見た事は秘して語らぬ長枕　恵
あの夜のことば夢のまた夢　路
中世の気配感じる桟敷席　洋子
冬の曠野を独りさまよふ　敬
ここでよか西郷どんは腹を召す　路
浴衣干された物干しに月　洋
ゆつくりと乗る短夜の観覧車　敬
スパイ同士はまだ知らんぷり　恵
靖国の神にゆだねる開花どき　洋
死んだ息子に似る甘茶仏　斎
ナオ　ふらここにチマひらめかせ飛鳥めく　路
白磁の色は人肌の色　洋
武相荘次郎正子の美の館　同
面を打つては毀つひねもす　恵
突然の火箭に驚く御伽衆　斎
１０％消費税とか　恵
雪だるまへの字にきつく口結び　同
耳を聾するブブゼラの音　路
子供らに井戸と教科書プレゼント　敬
川溯る魚影次々　同
月白に男点前の泰然と　恵
入れる襖の一隅の皺　斎
ナウ　五線譜の彫られた墓碑に小鳥来て　路
籬の蔭に露のこぼるる　敬
コロポックルの末裔なりといふ家族　恵
半ばはものを探す長き日　路
花の山ふたつ越ゆれば腹が減り　斎
懸紙も良き銘菓草餅　洋

連衆　山口美恵　須賀敬子　倉本路子
大島洋子

第百十四回　猫蓑例会作品　1～4

1・香魚の座

歌仙「祭笛」　上月淳子　捌

祭笛恋知り初めし始めかな　淳子
　蝉生まる如震へゐる胸　千惠子
子供らの学習塾の賑やかに　郁子
　ポップコーンをきりもなく食べ　鄭和
満月を肴にビデオ鑑賞し　良重
　いよいよ影の長き藁塚　千
ウ　瓢箪を作る秘訣を教へられ　重
　太閤様も金ピカが好き　千
財テクは専業主婦のアルバイト　和
　胸を刺したる彼の一言　郁
意を決し従いて行きますどこまでも　同
　石焼芋の車ゆっくり　千
雪女郎松月影の寂しくて　和
　格安ツアー予約入れたる　重
アマゾンの密林に棲む黒き豹　和
　顔に似合はぬ甘やかな声　淳
花受けて子は堂々と正社員　重
　盲牌をするうららかな午後　千
ナオ　沖遥か巨船近付く春昼に　郁
　メニエル病に揺らぐ足元　千
名刹へ石段しかと昇りつつ　郁
　一礼をしてお茶を頂く　重
待庵に掛け置く小さきすぐりの実　和
　主の笑顔忘られぬ日々　郁
弓を引くその端正な背に惚れ　千
　貴方の為に洗ふ褌　同
先代は焼け野原から出発し　重
　社史をまとめる秘書室の窓　和
錦絵の銘酒のラベル照らす月　千
　見上ぐる方に渡りゆく雁　郁
ナウ　蓼紅葉敷く城跡に老友と　和
　夢心地なるギター自己流　郁
兄弟今日の釣果を比べ合ひ　同
　大川の水海へ滔々　和
花の宴かっぽれかっぽれ飛び入りし　淳
　淡雪誘ふ快き風　和

連衆　鈴木千惠子　東郁子　高山鄭和
　伊藤良重

2・山女の座

歌仙「ひめしやら」　式田恭子　捌

梅雨明の橋や出会ひの新しき　恭子
　その名も美しき庭のひめしやら　美奈子
ハンモック咥へ煙草の火を消して　鐵男
　独りでさがす素泊りの宿　冨美子
月皓と吾子の飽かずに見る図鑑　明子
　藻に棲む虫は何をすねてる　男
ウ　お不動に相撲浄化の願を掛け　奈
　謎のをんなは紅を濃く引く　冨
観光に行つて来ましたメイドカフェ　あ
　我家とちがふあの方の声　冨
好き嫌ひ言はずに食べる秋田犬　恭
　討入の日は其角そはそは　奈
歳晩の月を仰ぎて斗酒を酌み　冨
　友と語らふ毛髪のこと　あ
何処へでも元気な婆のシニアパス　奈
　派閥にあらずただの勉強　恭
花の香の流るる窓ににじり寄り　あ
　鏡の前で春ショールかけ　冨
ナオ　シャボン玉枝すりぬけてまた浮かぶ　恭
　五線譜にある青き風信　奈
故郷の虹の松原ふと想ひ　冨
　海峡に泣く拉致のいとし娘　あ
迷宮の入口なればこの糸を　奈
　ぞつとするほど惚れたあの夜　恭
湯たんぽの代はりに抱いたはずだつた　あ
　冬すみれ咲く細き裏道　冨
救急車急ブレーキの音がする　恭
　同じ姿勢で坐る固椅子　冨
万鬼祭十三ななつの月昇る　奈
　はぐれ蜻蛉の軒にひらりと　あ
ナウ　赤い羽根いくつもつける黒き衿　恭
　真向体操まづは真似から　奈
分校に異動辞令を拝領し　あ
　夜つぴて作るおこは弁当　冨
昇りゆくスカイツリーに花の雲　男
　春告鳥の唄の軽やか　執筆

連衆　鈴木美奈子　林鐵男　岩田冨美子
　徳永明子

3・姫鱒の座

歌仙「光揺るがぬ」　佐々木有子　捌

灼熱の光揺るがぬアスファルト　有子
夏潮匂ふ水門の脇　常義
床の間に好みの軸を掛け替へて　未悠
兄と弟ピアノ連弾　美恵子
表札は寓とありけり小望月　義
そっと覗きし熊の栗棚　有
ウ 錆鮎を上手にむしる箸遣ひ　美
初のデートは遊覧船に　悠
恋愛のテクニック本暗記して　有
風吹きぬけて木の葉そよげる　義
娘らを拉致されしより幾星霜　悠
凍月仰ぐ国境の町　美
転勤を祝ふ冬帽宙に舞ひ　義
オール電化の新築の家　有
愛犬は痩せの大食ひロシナンテ　美
万歩計つけ皇居一周　悠
老僧の説教に花しきりなる　有
灯いくつか路地は朧に　義
ナオ 移民史の夢ははるかに蜃気楼　悠
青い器にハートホヤ※活け　美
踊り場に佇む人の黒い背ナ　義
峰雲のごと愛の膨らむ　有
飛び乗った何が何でも逢ひたくて　美
キム・ヨンハ死し号泣の列　悠
おとといのニュースは早も忘れ去り　有
難破の船のうづくまる浜　義
賑やかに魑魅魍魎の酒盛す　悠
英語で習ふ料理教室　美
繊月を一筆画布に気を込めて　義
奏でる箏に秋の音あり　有
ナウ 幼児がじっと見てゐる茶立虫　美
卑弥呼の鏡偲ぶいにしへ　悠
世界へと自分信じて踏み出せる　有
山峡の田に水はひたひた　義
花浴びてほほえみ給ふ磨崖仏　悠
若い蓬で作る草餅　美

連衆　生田目常義　棚町未悠　武藤美恵子

※ハートホヤ＝ハート型の葉を持つ多肉植物。

4・黒鯛の座

歌仙「孫誕生」　根津忠史　捌

雲の峰孫の誕生祝ひけり　忠史
縁先に置く行水の桶　佐紀子
ラッパ吹き手作り豆腐売りに来て　芙美
頑固者には似合ふ鉢巻　雅子
月の出を猫はしっかり眺めをり　秀樹
線路の脇に揺るる穂薄　樹
ウ 奥飛騨の客に茶請の栗羊羹　雅
妻だと言って秘書現れる　芙
合鍵に揃ひの根付光りをり　佐
手拭の柄おかめひょっとこ　樹
あした吹く風はいかなる風ならむ　佐
巌窟王に共感の情　樹
高らかにノートルダムの納めミサ　雅
観光船に冴ゆる月射し　同
盃は時計回りに回されて　芙
長幼之序を知らぬ若者　雅
朝稽古講道館は花の雨　佐
巣立の鳥の飛び立てる杜　雅
ナオ 出開帳列の尻尾に並びゐて　樹
コラムニストは評論家とも　芙
後知恵のもっともらしい阿呆達　樹
浮かれ太鼓を打ち鳴らし行く　佐
山上に鎮まりたまへ海の神　樹
年経るごとに揺らぐ夫の座　雅
あの頃は水着に秘めし恋心　樹
我はモナリザ笑みでごまかす　芙
パソコンが得意な彼の誤字脱字　佐
どこに在るのか有耶無耶の関　雅
女城主守りし城に昇る月　芙
突っついてみる籠の鈴虫　樹
ナウ ヨーグルトゴーヤジュースを欠かさずに　雅
体重計に交替で載る　芙
壁に貼る株価の線はまた下がり　佐
掛けっぱなしの「夢」の掛軸　雅
花浴びて副団長の持つ団旗　史
一二三で放つ風船　佐

連衆　間佐紀子　間瀬芙美　武井雅子
青木秀樹

第百十四回　猫蓑例会作品　5～8

5・緋鯉の座

歌仙「スカイツリー」　石川葵　捌

スカイツリー其は炎帝のしもべかな　葵
　甲板灼くる曳船の列　了斎
賑やかに通学の子等過るらん　千町
　たどたどと弾くピアノレッスン　幸子
片月は兎の耳の飛び出して　わこ
　薄ひともと活くる縁側　町
ウ　去来忌の小さき墓を京に観る　わ
　嫁にも行かず死んだ妹　斎
枕絵のそばで顔など洗ふ猫　町
　背をしなやかにバーを越えよう　幸
CO2減らすつもりのエコ暮らし　わ
　煙霧に赤くぼんやりと月　斎
首の無き王の羽織れる裘　同
　平和は進みけふもグルメで　町
一人旅すぐに隣と仲良しに　わ
　古典文化に尽きぬ薀蓄　斎
この宮の主神木花開耶姫　町
　百千鳥鳴く山峡の朝　幸
ナオ　南気にラジオ体操矍鑠と　わ
　もんぺがいいの楽で目立つの　斎
丼好き天丼かつ丼親子丼　町
　耐震設計売りのマンション　わ
兄さんの刺青鯉の滝上り　町
抱いて離さず明くる短夜　斎
オートバイ身内に熱を残しつつ　幸
　サンタマリアの讃歌ハミング　わ
初雪の吸はるるごとく石に消え　町
　鼻緒の黒き桐正の下駄　斎
月の行く方の都にあくがれて　幸
　オンザロックに齧るオリーブ　町
ナウ　軸装の曼荼羅揺らすつづれさせ　わ
　母の笑顔の浮かぶ坪庭　斎
ああ夢だすべて夢だとつぶやきぬ　町
　雲は象にも駱駝にも見え　斎
落花霏々ころもの里の縄電車　葵
　春暮の道の曲がる城跡　幸

連衆　原田千町　鈴木了斎　横山わこ
　飯島幸子

6・琉金の座

歌仙「夏鶯」　副島久美子　捌

風渡る夏鶯の声を乗せ　久美子
　里山を背に田草取る人　節子
リニューアル姉のブラウス丈つめて　央子
　百円ショップ角のその先　昭
待宵の猫の集会駐車場　節
　塩を擦り込み茹でる枝豆　央
ウ　八尾町住み慣れてまた巡る秋　節
　あの股引の絹の艶めき　央
口紅の残る盃差し交し　昭
彼の抱き癖わたくしに合ふ　央
クルージングローンかかへて地中海　節
　狐火ばかり追へるうたかた　央
庭園の雪吊越しに繊き月　昭
　「酔鯨」もよし「黒田武士」また　央
医者の指示どほり薬を飲み尽す　節
　音もなく来る電気自動車　同
ベルリンの壁の跡地に花を浴び　昭
　手品師の出す蝶の真白に　節
ナオ　母がりへ家苞にせむ蓬餅　同
　すぐ締切のカルチャーセンター　昭
へたがいい唄も俳句も陶芸も　央
　色即是空時は流れる　昭
白鵬の独走許す名古屋場所　央
　なすびは生らぬ瓜の蔓には　同
突然の変異か何といふ美女よ　昭
　ひっさらいたいハーレーを駆る　節
音絶えて迷路の奥の密かごと　同
　壁に薄れし落書の跡　久
二百十日無事に過ぎ去り月の影　央
　草むら深くすだく虫聴く　久
ナウ　こそばゆき敬老会の茸飯　昭
　あぐらの中にすっぽりとやや　央
コミュニティーバス何処までもワンコイン　久
　生年月日西暦で書く　昭
霏霏と降る花の舞込む阿弥陀堂　久
　旅人遥かかぎろへる中　央

連衆　長坂節子　遠藤央子　松原昭

7・岩魚の座

歌仙「音合せ」　近藤守男　捌

向日葵や合唱団の音合せ　守男
エンゼルフィッシュゆれる水槽　暁巳
新型の眼鏡の調子ほどよくて　霞
年に一度は高い買物　あや
練習船総展帆の月の海　達子
帰る燕に児らの手を振る　子
ウ 住職の趣味はおしゃれな菊人形　や
か細いよりもふっくらがよい　同
ティファニーの指輪のサイズむづかしく　霞
するりぬけゆくマーメイドかも　同
軽やかに童話の馬車は王宮へ　巳
手足耳まで全部霜焼　や
井戸の月寒風すさぶ水仕事　巳
うちは太鼓の響くお隣　同
1Q84なんのことやら三冊も　子
未だ抜けないミーハーの癖　巳
花の宴ボデーガードは几帳面　や
門扉きちんと暮れかぬる中　巳
ナオ 鐘の声朧おぼろに流れ来て　霞
夢のつづきはまたあした見る　や
シリーズの探偵いつも巻煙草　巳
よぢれ加減の縞のネクタイ　や
噴水の落ちる時には人離れ　守
自転車停めて氷菓販売　霞
経済は現場見ないと分からない　巳
俺の女は左ききなり　や
ねえあなた丁度お風呂が沸きました　巳
肩すべる衣スローモーション　霞
満月を描く裏方村芝居　同
新酒到来たのし車座　子
ナウ 三輪山は山が神体秋津飛ぶ　巳
特色のある図鑑出版　や
ケータイの電池充電忘れずに　霞
友と分けあふ塩のおむすび　巳
SLの通る度散る祖父の花　守
毛を刈られたる羊ぴょんぴょん　子

連衆　島村暁巳　高塚　霞　中林あや
篠原達子

8・蘭鋳の座

歌仙「大川に」　山口美恵　捌

大川に戦流るる河童の忌　美恵
裸の子等の水しぶき上げ　士郎
万歩計いつもベルトへ挟みゐて　和代
ランチボックス薄型がいい　泉子
まんまるの月の兎は安眠中　要子
風もないのに揺れる瓢箪　士
霜降にカードゲームのきりもなく　泉
ウ ひそひそ話毒がちょっぴり　要
頑丈な胸して実は草食系　代
美姫三人を隠す天幕　士
シタールの調弦難く夜も更け　泉
洞の梟みじろがぬ月　代
氷壁に逆さ吊りなり仇敵と　士
事業仕分けの後の宴会　泉
通知表あっけらかんとすぐ広げ　要
干菓子の型は家の宝に　代
碧眼の婿が花守七代目　泉
微恙の朝春雷を聞く　士
ナオ オレンジを並べイーゼルひたと決め　代
ベレー帽には手作りのロゴ　泉
わが街を似非紳士ども徘徊し　要
猿の電車に試乗する会　泉
夏の夢和算で微分つひに出来　士
酒中花開く色はももいろ　同
フリンジの袖ひらひらとさあ勝負　要
やんごとのなきお方身悶え　泉
捨て犬のどこか愛嬌残りをり　恵
からんころんと凍る足音　泉
月光に神の影見ゆチョモランマ　士
身に入むばかり折々の書　要
ナウ 不細工な菊人形も希ながら　士
延命の水汲みにゆく列　代
平均台ベンチ代はりに語る爺　泉
遠くかすかに故郷の島唄　代
颯爽と紙の飛行機花乗せて　恵
日永にはじくそろばんの玉　要

連衆　横井士郎　長崎和代　青木泉子
山本要子

第百十四回　猫蓑例会作品　9～10

9・白鮠の座

歌仙「差す潮や」　青島ゆみを　捌

差す潮や土用次郎の隅田川　ゆみを
夏闌の水面航跡　文子
じっくりと現代アート挑みゐて　英子
バーナで繋ぐ鉄の廃材　遊民
城郭に月の描ける人の影　吉文
心鎮める行合の空　英
ウ　鈴虫の音に浸りつつ披く文　文
一葉に似し愛のうすきを　吉
焼き餅はきつね色なるほどがよき　民
止まったままの時計外さず　文
ジュネーブの国際会議踊るなり　英
民主の捩れ痛い宰相　民
凍てし闇探査衛星黙々と　吉
よくぞやったと熱燗の月　英
下町に江戸職人の誇り持ち　文
リヤカーで来るポン菓子を追ふ　吉
み仏の御目の彼方花の散り　民
この巡礼にあつきご報謝　を
ナオ「暫」と弥生狂言決る声　文
家紋の和服久々に出す　英
名古屋場所ダイジェスト見て我慢する　民
いまどうしてるメタボ幹事よ　吉
伊達男仕上げの技をご覧じろ　英
清正公の井戸へ日参　文
手をつなぐバンジージャンプに恋を賭け　吉
キスオブファイアー燃えろ燃えろと　民
翼持つ夢の車の誕生す　文
怪獣のさばるＴＶ番組　英
良夜なり未完の塔を仰ぎ見る　文
爽やかに立つブティックの前　吉
ナウ　故郷を偲び友どち秋惜しむ　を
八一の歌集旅の鞄に　民
格子窓口笛そっと聞え来て　吉
雀に抛る食パンの屑　文
伝説の山里に花盛りこぼれ　を
童駈ける春雷の原　英

連衆　橘　文子　佐古英子　内田遊民
永田吉文

10・飛魚の座

歌仙「大津絵の」　松島アンズ　捌

大津絵の鬼念仏の暑さかな　アンズ
おかはりをする氷金時　實
夏麻刈高校生の手を借りて　孝子
海岸通り抜ける自転車　敦子
繊月のただひつそりとかかりたる　志世子
相撲触れする太鼓軽やか　世
ウ　手を休めおやぢ一服松手入れ　實
Ｍｒ・Ｘ別荘で待つ　世
きつちりと金でけぢめをつける仲　孝
スクランブルはごつたがへして　實
横丁を入れば鰭酒雪明り　孝
釜の滾りも夜咄の月　敦
只管打座脳活性を語る僧　世
三歳の掌がくれる飴玉　孝
あら不思議箱から鳩が飛び出した　敦
天然の美にこもる哀調　孝
人生の荷のそれぞれに花を見る　實
朝市に売る婆の山独活　世
ナオ　町川の友禅流しうららかに　孝
忍者屋敷へ続く地下道　世
幾万の鬨の声ともブブゼラは　孝
パエリアにして喰ってやる蛸　敦
放浪の職人修行に咲いた恋　孝
独り笑ひを妻が怪しむ　實
リコールのプリウス停まる駐車場　敦
無いやうである時の氏神　孝
夢だつた安田記念の万馬券　實
老眼鏡を作り替へねば　世
伯爵のシャトーを囲む森の月　孝
虫ひたと止む闇の深さよ　世
ナウ　耕運機ゆつくり進む刈田道　實
旅の予定を立てる楽しみ　世
ＣＭのサプリメントを取り揃へ　孝
雛壇の前男子正座す　敦
注連の木の無限に花を降らすなり　ア
飛沫をあげて追ひし若鮎　敦

連衆　梅田　實　坂本孝子　武井敦子
秋山志世子

温故知新

3：発句悪ければ一座みなけがる

●至極の大事、ただ発句

二条良基『筑波問答』より　延文二（一三五七）年～応安五（一三七二）年頃

当道の至極の大事、ただ発句にて侍るなり。発句悪ければ一座みなけがる。（中略）まづ、発句のよきと申すは、深き心のこもり、詞優しく、気高く新しく、当座の儀にかなひたるを上品とは申すなり。一つも欠けたらんは、うるはしき秀逸にてはあるべからず。（中略）この比は、ただ句も発句のやうに心を配り、一かどあるやうにし侍れども、ことさら発句はその詮のあるやうに、一ふしを案じ入れてすることなり。（中略）「千句の発句の姿、当座の発句の姿、いささか差別あるべきにや」とぞ承り置き侍りし。

《現代語訳》

連歌の道で何より大切なことといえば、とにかく発句です。発句の出来が悪ければそれだけで一巻全体が台無しになってしまいます。（中略）どんな発句が優れているかというと、深く心がこもり、言葉が優美で、気高く新しく、その場の事宜にぴったりかなっているのを上品というのです。この条件が一つでも欠けていたら、すばらしい秀逸の句とはいえません。（中略）このごろは、発句以外の句でさえ発句並みに気を配って、ひとかどの句になるようにするのですから、ましてや発句はその甲斐があるように、何かひとつ際立ったところを工夫して詠み入れるのがいいでしょう。（中略）「千句の一巻の発句の姿と、とりあえずの一座の発句の姿と、少しも違いがあるべきではない」とうかがっています。

●さまざまの風情一かたならず

心敬『ささめごと』より　寛正四（一四六三）年

發句は歌の卷頭になぞらへたる句にて侍れば、大やうに優々とさしのびたるものなるべし。然れども、撰集などこそさやうにも侍れ、百首五十首以下の卷頭は、時により事によると見えたり。さまざまの風情一かたならず。發句もおなじ題にて日々夜々のことなれば、一つかたちをのみ作り侍らんも、をさをさおろかなるべし。

●巧みたる発句は

宗祇『宗祇初心抄』より　文明五（一四七三）年

発句などの事、当座にてさす事まゝあり、さ様の時は力及ず、発句をする事にて候、それは其処の当座の体、又天気の風情など見つくろひ、安〳〵とすべし、さ様に候へば当座出来たる発句と聞えておもしろく候、巧みたる発句は古句案じたる心ばへ見え候て其興なく候。

●取合はす・あわざるの論

去来『去来抄』より　元禄十五（一七〇二）年～宝永元（一七〇四）年頃

去來曰く「先師は門人に教へ玉ふに、或は大いに替りたる事あり。譬へば、予に示し玉ふには『句々さのみ念を入るゝものにあらず。又、一句は手強く慥に俳意作すべし』と也。凡兆には『一句僅に十七字、一字もおろそかに置くべからず。はいかいもさすがに和歌の一體也。一句にしほりのあるやうに作すべし』と也。是は作者の氣姓と口質に寄りて也。惡敷心得たる輩は迷ふべきすじ也。同門のうち、是に迷ひを取る人も多し。」

先師曰く「ほ句は頭よりすらすらと謂ひくだし來るを上品とす」。洒堂曰く「先師『ほ句は汝が如く二つ三つ取集めする物にあらず。こがねを打ちのべたるが如く成るべし』と也」。先師曰く「ほ句は物を合はすれば出來せり。其能く取合はするを上手といひ、惡敷を下手といふ」。許六曰く「ほ句は取合はせ物也。先師曰く『是ほど仕よきことのあるを人はしらず』と也」。去來曰く「物を取合はせて作する時は、句多く吟速か也。初學の人是を思ふべし。功成るに及んでは、取合はす・あわざるの論にあらず」。

●行きて帰る心の味ひ

土芳『三冊子』より　元禄十五（一七〇二）年頃

発句の事は、行きて帰る心の味ひなり。たとへば「山里は万歳遅し梅の花」といふ類なり。「山里は万歳遅し」といひはなして、梅は咲けりといふ心のごとくに、行きて帰るの心、発句なり。山里は万歳の遅しといふばかりのひとへは平句の位なり。

先師も「発句は取合せ物と知るべし」といへるよし、或俳書にも侍るなり。題の中より出づる事はたまたまなり。もし出でても大様ふるしとなり。

解題●前句を前提とする連歌文芸のなかで、唯一前句を持たぬ発句は極めて特殊な存在。連歌発生以来問題であり続け、今後も問題であり続ける。（斎）

美奈ちゃんのお父さんとK先生（下）

小野フェラー雅美

ハイデルベルクからケルンの隣町に引っ越して暫くしたころ、郁子夫人（美奈ちゃんのお母さん）より一九九〇年一二月二〇日付けで頂いたお便りに、「かれこれ一七年前に……ヨーロッパの旅に参りました。」とあります。その際ボンで客員教授をされていた「先生がドイツ滞在中ずっと同行して下さったのです。」と書かれたその先生が先回の歌仙のK先生だったのだと気づいたのは最近のこと。夫人はまた、「ドイツの自然はとても日本に似ていました。人を見かけず家もない、自然だけの道をバスが通る時まるで日本のどこかを通っていると思うほど、外国ということを忘れるほど、日本に似ていたことを思い出します。」と書いてくださいました。

そうですね。お二人がいらしたハイデルベルクは人口十二万ほどのこぢんまりした大学都市、ネッカー河の東岸にひっそりとあり、向こう岸からはオーデンヴァルトという混合林の森林地帯が始まります。「哲学者の道」も、陽光を反射するネッカー河を下に見ながらその森の端をうねうねと続くのです。森の中を少しゆくと、象牙細工で有名なミヒェルシュタットという小さな木骨建築の町があったり、十八世紀後半に当時世界最大と言われたパイプオルガンのあるアーモアバッハ修道院があったり。「愛の神の小川」というその名にふさわしい、四季折々の魅力をもった佇まいの町々なのです。霧の立ち始める今から徐々に秋色募り、木も草も、長い冬に備え始めていることでしょう。

加藤先生がずっと付き添われたということもその印象を強めたことと今は思いますが、おっしゃるように、ドイツの自然には、日本に似てはっきりした季節感があり、植生も似て、またそれが、これも日本のように地域によって微細に変化するため、私はまったく郷愁を感じたことがありません。ドイツ古来の歌や、ゲーテ、ハイネなどの詩には季節感溢れる言葉がふんだんに使われていますので、俳句や連句などの基盤となる語感を養う季の多様性を充分備えた国といえるでしょう。

あるネット句会を通して、加藤慶二先生がWerner Schaumann氏と共著で二〇〇四年に永田書房より出版されたSingen von Blüte und Vogel（『新歳時記虚子編　ハイク・花鳥諷詠』）を知ったのが一昨年、早速私はそれをドイツに持ち帰りました。八百以上の俳句作品のドイツ語訳を含む、四二八頁のドイツ語による著作です。

ドイツ語のタイトルは直訳すると「花と鳥を詠う」で、副題が「高濱虚子の歳時記」。一月から十二月まで月ごとに季語とその季語を使った作品例が日本語とドイツ語で挙げられ、注釈がつき、巻末に十二か月に振り分けられた三四八のあくまでも日本の季語とその独語訳がまとめてあります。

俳句の歴史全体を総覧したものではなく、サブタイトルの通り一部を切り取ったもので、北海道や樺太以北の緯度に相当するドイツでそのまま百％使える歳時記ではないとしても、これをドイツ語圏の読者が読めばより深い俳句理解に繋がり、ドイツ俳句協会などで現在発表されている形の俳句との隔たりがよく分ってもらえるのに、と、こちらの出版目録には見当たらないのが残念に思われるご著書です。

信州大学で長年教鞭を採られたヘルベルト・ツァハルト教授と加藤慶二先生がボンで巻かれたドイツ語歌仙に、ちょうど訪ねられた明雅先生（美奈ちゃんのお父さん）も参加なさった巻を、加藤先生から『猫蓑通信』編集部宛にお送りいただいたとのことなので、加藤先生の日本語訳でご紹介させていただきます。縁あってかなり前にボン郊外にあるツァハルト教授のお墓にもお参りいたしました。昨年暮亡くなりました母と共に。

歌仙「アネモネ」の巻

苔の床にアネモネ白し森の朝　H・ツァハルト
　処々に雲雀たかなく　K・加藤
春眠を醒すジェットの飛来して
　厨辺に立つ丸き母の背
酔客を送る月影微笑みて
　ショパンの曲に虫の声やむ
ウ
一葉のもみぢに信濃の想いあり
　枕に残る髪のひとすじ
我が母校良き仲人の役果し
　ラインの河に詩情漂う
今日は今日いざ酒飲まんわが友よ
　夢と理想の消ゆる四十
秘やかに月も泳ぐや夏の海
　廃墟神殿蜥蜴一匹
テロ事件心の故郷胸重し
　ドクトルファウスト謎の人物
篝火を囲みて和せり花と人
　亀鳴くぞよと翁つぶやく
ナオ
御水取り新妻長き裳裾ひき　K・K
　マリア涙し仏陀ほゝえむ
寒の雨もう逢うまじき人送る
　隣の主婦かドア閉ずる声
犬の目をのぞく教授の肩優し　H・Z

甘き渋味舌のモーゼル
花火あげ夜空に祈る除夜の鐘
妻とたわれて帰る雪道
石油危機食糧不足世に満てり
日本遊学学生の夢
アドリア海夕日に染り月のぼる
銀杏黄葉に映ゆる胸像※
ナウ 燕帰りわが帰る日も近づきぬ
少女のピアノが乱す夕暮
針ねずみアウトバーンをよちよちと
浪の渦まく悪魔棲む岩
蓬髪に落花一片羇旅の果て　明雅
いとしのボンよ春の朝よ

一九七四年四月二日起首　七五年七月三十日満尾

※ナオ折端原註：日本から輸入された銀杏の樹がベートーヴェンの胸像の前に立っている。
編集部註：オリジナル日本語版の作者名表記「H・ツァハルト」「拙次」を、ドイツ語版を参考にこのように改めさせていただきました。

初期バロックのルードヴィヒスブルク城（09年5月：小野）

羅浮亭正江宗匠七回忌追善

脇起二十韻「白桃」　倉本路子　捌

白桃の冷えて明治の切子かな　正江
友と語ればさみだるる窓　路子
新刊書繙く時のときめきに　和代
使ひ馴れたる極太のペン　文子
ウ バイク駆り旅する月の日本海　豊美
君に口づけ風の爽やか　有子
再見（つあいちえん）と乱れし髪のすずろ寒　路
からくり時計小人ぴこんと　代
大道芸箱に投銭石畳　文
オウンゴールに地団駄を踏む　豊
ナオ 里近く棲みたる熊は不眠症　有
凍月よぎる宇宙船あり　路
重文の修復作業なりはひに　代
家族教会地下に額づく　文
ワイン酌む僕とあなたとギターとで　豊
黙深くなる愛生まる時　有
ナウ 年金であの世の夫に養はれ　文
穴出でし蟻一糸乱れず　代
花爛漫朱の山門を覆ひたる　路
湯島歩けばともる春灯　豊

連衆　倉本路子　長崎和代　橘　文子
高橋豊美　佐々木有子

平成二十二年六月二十三日　首尾
於　新宿消費生活センター

羅浮亭正江宗匠七回忌　橘　文子

本年六月、羅浮亭正江宗匠七回忌を修しました。羅浮亭宗匠は、猫蓑会発足時から主宰東明雅先生を補佐し、猫蓑会発展に尽され、深川連句会（以前は関口、深川連句教室）の世話役、また連句初心者のための土良の会（平成四年発足）、神楽坂連句会（平成五年発足）を立ち上げて指導に当られました。

二十韻「大暑」　秋元正江　捌

新宿の連句はじめの大暑かな　正江
日傘ゆらゆら一列の隊　啓子

連衆　岩井啓子　橘　文子　倉本路子　八代良子
権頭和彌　中田あかり　佐藤正秋　小林千雪
浅賀淑代

平成四年七月二十五日　首尾　於　新宿瀧沢

半歌仙「秋祭」　秋元正江　捌

秋祭ここは牛込総鎮守　正江
縁でふるまふ焼きたての黍　有子
夕月の峠路越ゆるひとならん　光子
繰り返し書く難しい文字　侃勇
毛糸玉猫のしっぽに触れさせて　妙
ブーメラン持ち着ぶくれの子ら　冨美
ウ 彫刻の森のムーアの女身像　登代子
やっと独りになれしつかの間　妙子
今週の土曜日私あいてます　有
ダイヤもいいわ恋の囁き　妙

髪の毛にコカインの出る摩訶不思議　登
　焙烙灸のえらく効きたり　勇
ようそろと遠洋航海夏の月　美
　老いたる刑事褪せし風呂敷　光
バーテンにモスコミュールを奢られる　子
　幻に見ゆ早春の蝶　妙
城山にねころんでをり花の雲　美
　八十八夜の風にのる唄　勇

連衆　佐々木有子　真田光子　猪瀬侃勇　橋本　妙
　村田冨美　竹田登代子　中西妙子
平成五年九月十八日　首尾　於　新宿区立赤城社会教育会館

「大暑」は土良の会、「秋祭」は神楽坂連句会の、ともに第一回目の作品です。現在ではどの会も新しい連衆が加わり、楽しく続けられております。

カルチャー教室では、実作指導の外、発句の作り方も指導されました。連句会場には早めに着いて、周辺の自然に触れるゆとりを持ち、発句を案ずること。発句は挨拶だからといって、季語・切れ字を入れて事柄を説明しただけの安易な句にまとめないこと。などです。

これまでの正江忌二十韻（脇起り）の各発句、

苗香の香にまぎれたる話かな　文子捌
けふのことけふで終りぬ胡瓜揉む　冨美捌
絽の袂畳に触れて香ゆらぐ　和代捌
もうこのうまの睫毛褐色青あらし　豊美捌
白桃の冷えて明治の切子かな　路子捌

天上の座は如何でしょうか。

正江宗匠の教えを忘れず、明雅連句の裾野を耕し続けて行きたいと思っております。

事務局だより

●今後の予定

・俳諧芭蕉忌・明雅忌
十月二十日（水）
十一時～十七時（受付十時より）
於　江東区芭蕉記念館

・平成二十三年初懐紙
一月十六日（日）
十二時～十七時（受付十一時より）
於　ホテルフロラシオン青山

・平成二十三年藤祭
四月二十五日頃
於　亀戸天神社

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

・山寺たつみ様　平成二十二年七月　五千円
・諏訪欽二様　平成二十二年七月　六千円
・匿名　平成二十二年八月　二千五百円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●新会員

・武藤美恵子　愛知県豊田市在住
・岩田冨美子　東京都小金井市在住

●平成二十二年度猫蓑会総会・第百十四回猫蓑例会が開催されました

七月二十一日（水曜日）午前十一時より、江東区芭蕉記念館にて平成二十二年度猫蓑会総会・第百十四回猫蓑例会が開催されました。

会長挨拶に続いて会計報告、監査報告、猫蓑作品集会計報告、オフィシャルサイトについての報告、新会員紹介、初出席者紹介、新年度当番紹介その他が行われ、引き続き十卓に別れての歌仙実作、披講が行われ、午後五時に閉会しました。当日の作品は今号の八ページから十二ページに掲載しています。

●猫蓑作品集について

これまで例年、十月発行の『猫蓑通信』誌上で、猫蓑作品集の作品募集要領を告知し、あわせて応募用紙の配布なども行ってきました。

しかし今年は、これまで既に二十号を発行してきたことにふまえ、九月二十九日開催の理事会にて検討し、これを区切りとして今後の作品集の内容、体裁、発行方法、作品募集方法などを一から見直すことになりました。

このため、作品募集をしばらく延期いたします。新募集要領が決定し次第、改めて告知いたしますので、よろしくご諒承下さい。（理事会）

季刊　『猫蓑通信』第八十一号
平成二十二年十月十五日発行
猫蓑会刊
発行人　青木秀樹
〒１８２・０００３
東京都調布市若葉町２・２１・１６
編集人　鈴木了斎
印刷所　印刷クリエート株式会社